

シャボンの香り

松本 葉

イタリアの姑は家族の健康に気遣い、みんなで囲む食事作りに熱心で、近所のヒトの噂話にも熱心で、買物が好きで、サツカーも好きで、それより好きなのが美容院通いという、典型的なイタリアの主婦である。身の丈に合った暮らしを好み、慎ましやかだが、ときにドンと大きな買い物をして家族を驚かせることもある、そんなヒトだ。

暮らしを回すそのやり方はクラシックで、ときにもどかしいほど手動を好むのだが、それこそ彼女の手にかかると家の中はきちんと片付き、洗濯物はきれいに仕上がり、時間はかかるが肉の煮込みはホックリできる。秘訣を聞けば「ゆっくりやること、気楽にやること、イヤな日はやらないこと」とサラリと言っ。といつても彼女にイヤな日はないようで、いつ行っても姑は太めのウエストにエプロンをまき、手でも落ちた水でも埃でもチヨコチヨコツと拭く布巾を肩にかけ、歌をつたいながら働いている。廊下の鏡を見ながら

ら髪に手をやり、近づいては皺を嘆き、嘆いてもしょうがないわねと独り言をつぶやいては再び手を動かす。「料理は苦手よ。いつも母にお前は下手だねって言われたもの」

いつだったか、家事のなかで何が一番好きなのか尋ねると、彼女はまっさきにこんな風にしたものだった。意外な答えに「へえ」と私が驚けば、笑った彼女がこう言った。

「一番好きなのは洗うこと」

そういえば、姑がもつとも楽しそうにする家事は、洗濯やら食事の後片付けや床掃除といった「洗う」作業で、思い出してこう言えば彼女が照れながら「気持ちいいんだもの」とささやいた。

もちろん洗濯機はあるのだけれど、姑はどちらかというと手洗いを好む。洗濯機はシーツやタオルといった彼女の言うところの大物用で、使う日は「今日は洗濯機を回すけど」と家族に声をかける。色物と白い物をき

つちり分ける上に、洗濯機は満杯にならないと回さないから出番は少なく、数年前に息子たちからプレゼントされた新型のそれも所在なさげだ。

「いまどき、分けるなんて。なんでもつつこめばいいじゃないか。せつかくあるのもつたない」

家族にこう非難されては「もつたないから大事にしてるんじゃない」と言い返すのはいつものことだが、これは彼女独特の心遣いで、手洗いが好きなのよ、とある時、教えてくれた。「機械にまかせるのは心もとなくてね。きれいになっていくのを見るのがいいの。ストレス発散かしら」

姑とストレスはどうみても結び付かなかつたから私が思わず笑つと、「アタシにだって」と不満そうに言った彼女が真面目な顔でこう続けた。

「水がカタイからクスリを入れてなきゃならないでしょ。あれも煩わしいのよ。煩わしいけど機械が石灰だらけになつて壊れて

もね。いろいろ思うとつい、手になっちゃうの」

イタリアの水は硬水で、石灰がとて強い。触れるぶんには気がつかないが、水を使う場所は水分を拭き取っておかないとあつと言つ間に石灰がこびりつく。蛇口でも食器でも放つておくと白い濁りがすぐにつくのだがこれがたまる厄介で、特に機械ものは故障の原因になるといふ。だから洗濯機でも食器洗い機でも通常の洗剤のほかに石灰を溶かす、彼女が言うところのクスリを入れなければならない。

私自身、住みはじめた頃はこの石灰の強さに仰天した。これが噂に聞いた硬水とばかりに白い濁りを眺めたものだった。お湯をわかすポットの内側をこすると白い粉がポロポロと落ちて、これが体のなかに入っているのかとゾツとした。そういえばこの話を姑にすると彼女は「二ホンの水にはないの？」とびっくりにした声を出しながら「これで洗うといいのよ」とプラスチックのボトルを差し出した。「口に入れるものはね、クスリを使うのもナンだから、アタシはいつもお酢とお塩で洗うの。しばらく浸けておくとピカピカ

になるわよ」

試しに使つと彼女の言つとおりでた。そういえば彼女は汚れた食器もお酢を入れた水で洗う。漂白の効果があるのだといふ。彼女の台所には手の届くところに酢が置いてあつて、プラスチック製のフタにはキリで穴があけてある。ボトルを逆さまにしてお腹を押すと中身がピューッと勢よく飛び出す。

「汚れでも匂いでも自分の目と鼻を使って手で確かめながら洗つていく。こういう洗い方が好きなのよ。古いわね」

古いわね、と自らを笑いながら、着るものでもお皿でもなぐでも、洗つ作業をするときの姑はとて楽しんでさうだ。圧巻はおじいさんの代から使われているという木製のテーブルを洗うときで、この日はかりは舅も駆り出される。

月に一度、天気の良い日を選んで、ふたりはヨイコロシヨとばかりに大きなテーブルを庭に運び出す。太陽がもつとも当たる場所にそれを置いて、バケツにつめた薄い石鹼水をブラシにつけてゴシゴシ洗つ。

はじめてこの作業を見たとき、その豪快なやり方に仰天した。

木は水分を嫌うと思つていたから驚いたのだが、そう告げると姑は洗い方と同じくらい豪快に笑い、そして言つたものだった。「ずつとこうしてきたのよ。おばあさんもアタシの姑も。こつやると長持ちするつて。アタシも最初は驚いたわねえ。今じゃ、コレなしにひとつきは終わらないけど」

作業が終わると、テーブルの横に椅子を持ち出して、舅がドカンと腰を下す。体が痛くてたまらんとツブツブツ呟くのはいつものことだが、聞こえているのかいなののか、「来月もよろしく」と姑が言つのもいつものことだ。

「結局、アタシは自分のココロを洗っているのよ。ココロの濁りを取つてるの。だから洗うのが好きなのね。人生つていろいろ、あるから」

姑の心の淵をのぞいたようで、私は彼女の台詞にハツとした。彼女が過ごしてきた私の知らない長い時間を想つて返す言葉が失った。横では姑がきれいになったテーブルを嬉しそうに眺めながら、ひとり静かに笑つていた。



松本 葉(まつもとよう)

神奈川県鎌倉市生まれ。1984年自動車雑誌『NAVI』の創刊スタッフとして(株)二玄社入社。編集記者のかたわら「カーグラフィックTV」のキャスターをへて、1990年渡伊。トリノにて、自動車を中心とした取材活動や『AUTO&DESIGN』の翻訳を行う。2000年より南仏在住。フリーライターとして、NHKイタリア語講座などに連載中。著書に『愛しのティナ』『伊太利のコイビト』(新潮文庫)ほか。